

面 構 え

今やテレビやネットによる映像情報の時代。多くの人がモニター上に顔を出す。映像の氾濫とは、顔の氾濫にほかならない。政治家も二世、三世が占めるようになって、20～30年前に見たような顔が増えた。楽をして育った世代の表情には生活臭が無く、薄っぺらな言葉よりも一瞬の表情の変化がその人間の本質を表しているようでもある。

昨年12月の総選挙では自民党が圧勝し、安倍晋三総裁が第90代に続いて、第96代内閣総理大臣に就任した。6年ぶりの再登板ということだが、テレビに映る今の顔と6年前の顔を見比べてみても、雌伏6年の艱難辛苦が顔に出ているとも思えない。

脚本家の石堂淑朗は、彼の著書「顔を見ればわかる」(飛鳥新社)にて、安倍総理の父、安倍晋太郎の顔をもって、次のように評した。「すべての政治家に田中角栄に匹敵するような迫力を要求するのは、木に登って魚を求めるに等しい。それは判っている。しかし安倍の迫力のなさが加減、これはいったいどう説明してくれる？ 総裁候補と目される人でこんなにすげすげの、臺(とう)が立った大根みたいな人も珍しい」と。

安倍晋太郎の不幸は、かれの宰相実現のために粉骨砕身してくれる、裏方に徹する覚悟のある政治家が一人もいなかったことだという。鳩山一郎には三木武吉という策士が、田中角栄には二階堂進という仲間が、そしてカミソリといわれた後藤田正晴がいた。

6年前にはお友達内閣と揶揄され、今回は日本を取り戻すと意気込んで政権を担おうとする安倍首相。今後、ますます父親似の顔になるのか、それとも悠々迫らざる風姿の後藤田に近づくのか。ここ数年の首相交代劇を見ていると、1年後に答えは出るということか。(輿論)



大通公園を望む窓辺から

総選挙を終えて想うこと

2005年の総選挙で小泉首相(当時)は、「改革なくして成長なし」として郵政民営化を掲げて自民党は297議席を獲得し、この多数をもって社会保障費を毎年2,200億円削減し「医療崩壊」を招いた。2009年の総選挙では、「国民の生活が第一」を掲げた民主党が308議席を獲得する大勝利を果たし、55年体制は崩壊したが、鳩山首相の沖縄米軍基地問題、菅首相の公約違反の消費税増税発言、そして野田首相の消費税増税とTPP推進等の取り扱いで国民の信頼を失い、今回の衆議院選挙で自民党は圧倒的多数を獲得し勝利した。この2回の総選挙と今回の選挙の結果を合わせて考えると、いずれも野党がおおよそ300議席という大多数を獲得し政権を奪還している。これは小選挙区制という選挙制度にもよるが、揺れ戻しが余りにも大きく敗者の存在すらも否定するやの結果である。

このように日本人の選挙行動は、ひとたび政権に嫌気がさすと自己の政治理念、日本の現状と将来、そして後代への重い責任をも十分に考慮せずに一気に感情、気分、流れで投票行動を起こした結果、今日の自民党の勝ち過ぎに導いたと考える。そして今、私が最も懸念しているのは、この圧倒的多数の自民党政権が公明、維新、みんなの党と連立・連合して戦前の大政翼賛会の翼賛政治体制協議会もどきの政権体制で政治を動かしていく可能性があることであり、今後は緊張感をもって注視していかなければならない。

終わりに、私は戊辰戦争で薩長に敗れた会津藩の末裔である。長州出身の総裁には今一度、武士道精神、サムライ魂を思い起こし、さらに日本の医療の現況・将来については総裁復帰を果たしてくれた主治医団の意見によく耳を傾けて国政を担っていただきたいと思う。(K.N)